

## 日・韓国国の親子関係をめぐる比較研究

— 親の養育観・養育態度と子の心理社会的特性を中心として —

本村 汎・洪 上旭

A study of mothers' view of rearing, their rearing attitudes and  
psycho-sociogenic aspects of their children's personalities :  
A comparison between Japan and Korea.

HIROSHI MOTOMURA and SANG OOK HONG

## I. 問題意識と作業仮説

最近、青少年が引き起こす問題が粗暴化し、教育制度それ自体に問題があるのではないかということが、文部行政にたずさわる一部の人々から指摘されている。しかしこの指摘にもとづいて教育制度を改革する前に、なさねばならない多くの課題がある様に思われる。確かに、日本の社会が現在採用している6年(小学校)3年(中学校)、3年(高校)、4年(大学)という制度下では子どもたちは、入学試験の準備に追われてしまい、人格教育を十分に受けにくいという問題はあるが、しかし現在の中学校と高校を合体させて、6, 6, 4制に改め、入学試験を一回減らしたからといって、現在のような受験にまつわる諸問題が解決されるとは限らない。むしろ、大切なことは、この制度をささえているトータルな文化的体系にある様に思われる。

日本の社会は、戦後、家族主義的な国家観に代つて、民主的個人主義の国家観を採用し、教育勅語は教育基本法に、家族主義的な婚姻観は、個人の自己実現が保証されなければならない民主的個人主義の婚姻観に変化してきた。ところが、経済的な生活は豊かになったものの、離婚は増大し、非行少年や情緒障害児の発生件数も増大の傾向である。

その様な状況にあつて、学校側は、その主たる責任を家庭に押しつけ、PTAは反対に、その責任を学校側に押しつけるという傾向があらわれてきている。しかし、それは問題の解決にはつながらない。

ところで、人格の中核的部分が家族のなかで形成されることはいうまでもない。人間は家族のなかで生れて、家族のなかで基本的なしつけを受けて、家族のなかで文化を伝承していくことを思えば、家族と人間とが切っても切れない深いつながりがあることが理解される。家族

のなかで、公共性、道徳性、自主性の基礎が形成され、これらの特性が欠如した場合に問題がおこるとするならば、これらの特性がどのような文化的価値体系のなかで、しかもどのような養育観をもった両親に、どのように育てられた時に、欠如するかが問われなければならない。

本研究では、上述の様な問題意識を基礎におこなわれるわけであるから、戦略的には通文化的研究が要請されてくる。本論文で韓国が比較の対象としてとり上げられたのは、上述の理由からであるが、いまずこし説明を加えるならば次の通りになる。

現在、韓国は日本と同じ様に資本主義体制をとっているが、生活慣行やライフ・スタイルは、日本のそれとは異なっている。韓国では依然として儒教思想が生活に浸透しており、今回の調査対象となった親の養育観や子どもの家族関係にも影響を与えている様に思われる。

この小論においては、民族文化が異なれば親の養育観や、子どもによる家族関係の認知の仕方も異なるという命題を検証し、どのような「文化」が、子どもの問題行動の防止につながるかを明らかにするための基礎資料としたい。

## II. 方 法

II-1. 研究の対象：両国の小学生4年、5年、6年の児童とその母親を対象とした。実際使った学年別、男女別の実数は表Iの通りである。小学生のうち、高学年を対象としたのは、調査方法が質問紙法で、対象者がその質問内容をよく理解することができて、親子関係について適切な判断がよりよくできることが必要であったからである。実際の整理にあたっては、MMP Iの嘘構点を参考にして、不適切と思われる資料を除いた。韓国の小学生は大邱市内T小学校の児童であり、日本の小学生は守口市のO小学校の児童である。できるだけ、両国の

表1 日・韓国の子どもの性別、学年別資料の実数

性別 学年	韓 国 (234)			row	日 本 (293)			row
	4	5	6	total	4	5	6	total
男	43 18.38	34 14.53	48 20.51	125 53.42	59 20.14	39 13.31	50 17.16	148 50.61
女	32 13.67	39 16.67	38 16.24	109 46.58	49 16.72	53 18.09	43 14.68	145 49.39
Column total	75 32.05	73 31.20	86 36.75	234 100.00	108 36.86	92 31.40	93 31.74	293 100.00

上段：人数  
下段：%      以下同じ

研究対象の社会，経済的条件を統制することが望ましかったが今回はこの点について特別の考慮をすることができなかった。しかし，大邱市は人口150万の韓国における第3の都市であり，守口市も大阪市に隣接する中都市で，同様の都市的生活様式をもっていた。なお，調査対象の家庭は，両国においては中流家庭に所属すると思われる。

II-2. 資料処理の手続き：日・韓の調査において，子どもの場合は，被験者が調査票にそれぞれ本人の親子関係や本人自身の心理社会的特性についての評価を記入する自計方式を採用し，学級単位で集団的に実施した。親の場合は，子どもと親を1組にして，それぞれの子どもが家に持ち帰った調査票に親が答え，記入した調査票は，子どもを通して，担任の先生に回収してもらうという留置調査法で実施した。

調査期間は昭和57年7月10日から，昭和57年9月30日までである。

II-3. 指標化：調査票は親用，子ども用からなっている。そして，それは内容を同じくする日・韓それぞれの母国語による2種の調査票である。

II-3-a. 親用：親の教育目標，期待，しつけへの自信と不安，子どもへの満足度，子どもへの学歴，しつけの決定者，しつけの場，両親間の方針，両親間の意見の一致度に重点をおき，14項目を設けた。それぞれの項目についてその回答には，回答番号とか○印を記入するようになっている。<sup>1)</sup>

II-3-b. 子ども用：子ども用の調査は調査1と2から構成されている。

i) 調査1：親と子どもとの関係をみるために，TK式診断的新親子関係検査<sup>2)</sup>を用いたが，80項目からランダムで選んで40項目に減した。TK式診断的新親子関係検査はかなり標準化され，項目数を減らしても親子関係得点に変化はないと思われるが，得点を各質問項目ごとにしらべると，その得点はすべて正規分布をしていると

ころから，TK式検査と同じ方法にて整理を行なった。なお，本調査項目の中に，相反する内容の2つの項目を設け，両者の相関を調べたところ，父親に対する場合， $-0.38$ ， $P<0.00$ ，母親に対する場合， $-0.42$ ， $P<0.00$ となり，かなり高い負の相関が見られた。調査1は，子ども自身が「父親について」「母親について」どう考えているかを4段階尺度で評価するものである。そして，不満，非難，厳格，期待，干渉，心配，溺愛，盲従，矛盾，不一致のそれぞれの項目得点の総計を出し(例えば，「わたしよりも，ほかのきょうだい(又は友だち)のほうが両親にほめられるとおもいます」に対して，ぴったりあてはまる1点，だいたいあてはまる2点，あまりあてはまらない3点，ぜんぜんあてはまらない4点の評価である)，これを親子関係得点とした。1つの調査項目の総計の得点は最低4点から16点の範囲になり，得点が高いほど親子関係の安定性を示し，低いほど親子関係の危険性を示すことになる。

ii) 調査2：子の心理社会的特性をみる為に，次の7項目を選んで検討することにした。すなわち「社会性」「自立性」「攻撃性」「集団への参加」「自発性」「自己統制」「公共心」の7項目を設けた。心理社会的特性の概念は，E.W.Burgessの著書「The family」<sup>3)</sup>から引用したものである。E.W.Burgessは「The family」の中で，パーソナリティを biogenic の側面と psychogenic の側面と sociogenic の側面の3つに分けて考えた。すなわち，psychogenic の側面は，生れた後からの兄弟関係，父子関係などの中で作り上げる側面であり，sociogenic の側面は家族関係以外の関係，すなわち，友人関係において形成されたものである。ここで，私は，psychogenic の側面と sociogenic の側面の両方を含む概念として「心理社会的特性」という言葉を使うようにした。なお，それぞれの質問項目については対象者が自分自身に一番よくあてはまるものに○をつけるようにし，3段階尺度で評定するものである。それぞれ

の項目の総計を出し（例えば，‘わたしは人の前にでて  
もあまりはずかしがらないほうです’に対して，はい1  
点，普通2点，いいえ3点の評価である），その合計  
点を子の心理社会的特性の得点とする。得点は，最低4  
点から最高12点の範囲になり，得点が低いほどポジテ  
ブであることを示す。ただし，攻撃性の項目は，得点が  
高いほど攻撃的でないことを示す。なお，7項目間の相  
関には多くの有意な関連がみられた。さらに，調査項目  
として選ばれた28項目の信頼性を検証するために，MM  
PI<sup>4)</sup>の嘘構点（The lie scale）のうち，13項目を用  
いた。MMPIの嘘構点は2段階尺度で評定するもので  
あり，得点は最低13点から最高26点の範囲になり，点  
数が高いほどそをつく傾向があるということである。本  
研究ではMMPIの嘘構点を参考にし，22点以上のもの  
は資料として使わなかった。したがって，子ども用の調  
査2で用いたMMPIの嘘構点が22点以上の子どもにつ  
いては子ども用調査1とその子どもの親の調査も資料か  
ら除いた。

Ⅱ-4. 分析枠組み：日・韓両国の文化・社会的条件  
を説明変数とし，子どもの心理社会的特性，子どもの認  
知した親子関係，母親の養育観の3つの側面を被説明変  
数とし，構造機能主義社会学の立場から明らかにしよう  
と考えた。具体的に言うと，日本と韓国の母親の養育観，  
子どもの認知した親子関係と子の心理社会的特性を調べ，  
両国間にどのような差異や類似があるかを明らかにしよ  
うとした。

### Ⅲ. 結 果

#### Ⅲ-1. 親の養育観について

それぞれの質問項目ごとにその結果の全体的傾向，  
日・韓両国間の違いについて検討し，さらに，子どもの  
性別からみた親の養育観の違いについてもふれていく。

1) 子どもへの理想像について：日・韓で望ましい子  
ども像の内容とされているものは表2で示す通りである。  
表2によると，韓国の母が期待する子どもの理想の特性  
としては「独立性・自主性」をあげるものが最も多く，

表2 理想的な子ども像について

性 別 国 別 項 目	全 体		男 子		女 子	
	日	韓	日	韓	日	韓
独立心・自主性に富んだ子	86 30.82	124 ** 53.91	53 37.06	71 ** 51.72	33 24.26	53 ** 49.53
創造力に富む子	6 2.15	29 12.61	4 2.80	16 ** 13.01	2 1.47	13 ** 12.15
情操の豊かな子	28 ** 10.04	5 2.17	11 7.69	2 1.63	17 ** 12.50	3 2.80
だれとでも協力できる子	34 12.19	27 11.74	13 9.09	14 11.38	21 15.44	13 12.15
すすんで公衆道徳を守る子	4 1.43	11 4.78	2 1.40	6 4.88	2 1.47	5 4.67
約束やきめたことはしっかり 守る子	57 ** 20.43	14 6.09	32 ** 22.38	7 5.69	25 ** 18.38	7 6.54
はっきり自己の意見をいう子	26 * 9.32	10 4.35	9 6.29	3 2.44	17 12.50	7 6.54
礼儀正しい子	21 7.53	8 3.48	7 4.90	2 1.63	14 10.29	6 5.61
金銭をそまつにしない子	4 1.43	1 0.43	3 2.10	1 0.81	1 0.74	0 0.00
勤労を尊ぶ子	9 ** 3.23	0 0.00	8 5.59	0 0.00	1 0.74	0 0.00
趣味や教養を深めるために、 努力する子	4 1.43	1 0.43	1 0.70	1 0.81	3 2.21	0 0.00
そ の 他	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00	0 0.00
計	279 100.00	230 100.00	143 100.00	123 100.00	136 100.00	107 100.00

\*\*：1%以下の危険率

\*：5%以下の危険率（χ<sup>2</sup>検定による）

以下 同じ

半数以上を占め、次いで「創造力に富む子」「協力的な子」が1割をこえている。次に、日本の場合には、同じく「独立・自主性」の子が最も多く、「約束を守る子」「協力的な子」「情操豊かな子」の順である。このことから両国の母とも独立性、自主性を子どもの理想像を構成する重要な特性として評価しているが、とくに、韓国の母の場合、そういえる。なお、両国間の差を $\chi^2$ 検定によって調べると、いくつかの有意な差がみられた。すなわち、日本の母親より韓国の母親が概して「独立心・自主性の子」( $\chi^2=27.73$ ,  $p<0.00$ ), 「創造力の子」( $\chi^2=21.53$ ,  $p<0.00$ )をあげるものが多く、「情操の豊かな子」( $\chi^2=12.58$ ,  $p<0.00$ ), 「約束を守る子」( $\chi^2=21.61$ ,  $p<0.00$ ), 「はっきり意見をいう子」( $\chi^2=4.74$ ,  $p<0.05$ ), 「勤労を尊ぶ子」( $\chi^2=7.55$ ,  $p<0.01$ )では、日本の母の方が多かった。これらの結果については、

柏木<sup>5)</sup>らの研究でも同じ傾向が見られ、自己主張及び社会的スキルの発達を重視する米国の母親よりも、日本の母親が情緒的成熟、従順、礼儀、自立を重視している。さらに、子どもの性別による両国の母の期待のあり方を、各項目ごとに比較すると、韓国の母は、男女別なく子どもに「独立・自主性の子」(男： $\chi^2=11.34$ ,  $p<0.00$ , 女： $\chi^2=16.72$ ,  $p<0.00$ )、「創造力に富む子」(男： $\chi^2=9.91$ ,  $p<0.01$ , 女： $\chi^2=11.72$ ,  $p<0.00$ )を、日本の母親より重視しており、日本の母は「情操豊かな子」(男： $\chi^2=5.24$ ,  $p<0.03$ , 女： $\chi^2=7.40$ ,  $p<0.01$ )、「約束を守る子」(男： $\chi^2=14.72$ ,  $p<0.00$ , 女： $\chi^2=7.25$ ,  $p<0.01$ )を韓国の母親より重視しており、これは全体の傾向と同じである。

2)人生目標について：日・韓の母親の人生目標をみたところ、表3の結果が得られた。表3によると、韓国の

表3 人生目標

性 別 国 別 項 目	全 体		男 子		女 子	
	日	韓	日	韓	日	韓
いっしょうけんめい働き、節約して金持ちになる	28 9.89	32 14.35	18 12.68	15 12.61	10 7.09	17 * 16.35
まじめに勉強して名をあげる	15 5.30	59 ** 26.46	8 5.63	27 ** 22.69	7 4.96	32 ** 30.77
自分の趣味に合ったくらし方をする	132 ** 46.64	39 17.49	61 ** 42.96	20 16.81	71 ** 50.35	19 18.27
くよくよしないでくらす	24 8.48	14 6.28	10 7.04	7 5.88	14 9.93	7 6.73
どこまでも清く正しくくらす	44 15.55	31 13.90	26 18.31	19 15.97	18 12.77	12 11.54
国家・社会のためにすべてをささげてくらす	24 8.48	45 ** 20.28	13 9.15	29 ** 24.37	11 7.80	16 15.38
そ の 他	16 5.65	3 1.35	6 4.23	2 1.68	10 7.09	1 0.96
計	238 100.00	223 100.00	142 100.00	119 100.00	141 100.00	104 100.00

母にもっとも多いのが「名をあげる」の項目であり、次いで「自分だけのことを考えずに、国家・社会のためにすべてをささげてくらす」「自分の趣味に合ったくらし」の順であり、自分の名をあげるという立身出世の思考と、国家・社会のためにすべてをささげるという国家・社会中心的思考の両方が共存しているといえる。他方、日本の母は、「自分の趣味に合ったくらし」が他の項目にくらべ圧倒的に多く、次いで「清く正しくくらす」「金持になる」の順である。さらに、両国の親の人生目標を各項目別に比較してみると、韓国の母が日本より「名をあげる」( $\chi^2=44.71$ ,  $p<0.00$ ), 「国家・社会のためにすべてをささげる」( $\chi^2=14.49$ ,  $p<0.00$ )が多い。

一方、日本の母は「趣味に合ったくらし」( $\chi^2=47.38$ ,  $p<0.00$ )が韓国より多い。韓国の母の「立身出世」の多いのは、長期間の儒教主義的思想をうらづけ、歴史的に家門の名誉と関連し、現代社会の個人主義的傾向と結びついたことであると考察できよう。また「国家・社会のために」という項目では、総理府の研究によると、韓国の方が日本の方より、自国人(〇〇国人)である意識がはるかに高い(日本40.7, 韓国81.8)。一方、日本の母の人生目標についての結果は、牛島が西欧と日本の青少年を対象として行った研究とほとんど同じ傾向を示している。牛島<sup>7)</sup>は、このような結果から、趣味に合った生活とのんきにくらす態度は、人生に対する態度が積極



的でなく、自己防衛的な態度であるが、これは、敗戦により、国家意識とか積極的な社会的活動への意欲が減退したものといえると述べている。さらに、子どもの性別による両国の母の人生目標の比較において、まず、男子の場合、韓国の母が日本より「名をあげる」( $\chi^2=16.22$ ,  $p<0.00$ )、「国家・社会のために」( $\chi^2=11.10$ ,  $p<0.00$ )の項目が多く、日本の母は韓国より「趣味に合ったくらし」( $\chi^2=20.69$ ,  $p<0.00$ )が多い。女子の場合は、「趣味に合ったくらし」( $\chi^2=26.51$ ,  $p<0.00$ )の項目において、日本の母が韓国より多く、韓国の母は「名をあげる」( $\chi^2=29.78$ ,  $p<0.00$ )、「金持ちになる」( $\chi^2=5.23$ ,  $p<0.03$ )が日本より多い。したがって、日本では韓国に比べ、男女の子どもとともに「趣味に合ったくらし」が圧倒的に多く、韓国では日本と比べ、男子の場合「国家・社会のために」と「名をあげる」を重視している反面、女子の場合は、「名をあげる」を重視している。このような結果は、韓国の男子の子どもの母親が、日本の男子の子どもの母親に比べ、「国家・社会のために」の項目を選ぶ傾向が強いということであろう。

3)父権の低下について：韓国と日本における父権の低下についてみた結果は表4の通りである。表4によ

ると、日・韓どちらの国においても「父権があまり低下していない」と思う母はるかに多く、次いで「どちらかというと低下した」と思うの順である。なお、韓国の母は日本の母より「低下したと思う」( $\chi^2=12.64$ ,  $p<0.00$ )が多く、日本の母は「どちらかというと思う」( $\chi^2=17.28$ ,  $p<0.00$ )が韓国より多かった。しかし、低下したと思っている日・韓の母親も、それぞれ31.14%、25.34%存在していることに注目する必要がある。たしかに、「家」制度のもとでの父権は低下している。しかし、ここで考えなければならないのは、新しい父権の内容であり、父の位置の相対的变化も考慮しながら、個人としての生き方を追求していくことが今後の課題となってくるであろう。また、子どもの性別による両国の比較では、男子の場合、韓国の母が日本より「低下したと思う」( $\chi^2=10.51$ ,  $p<0.01$ )が多く、日本の母は韓国より「どちらかというと思う」( $\chi^2=7.71$ ,  $p<0.01$ )が多かった。女子の場合、日本の母が韓国より「どちらかというと思う」( $\chi^2=9.73$ ,  $p<0.01$ )が多かった。これは、全体の結果と同じ傾向である。

4)しつけへの自信について：表5によると日・韓とも「どちらかといえば不安である」がもっとも多いが、韓国の母が日本より「自信がある」( $\chi^2=14.40$ ,  $p<0.00$ )

表4 父権の低下について

項目	性別		全 体		男 子		女 子	
	国 別		日	韓	日	韓	日	韓
そう思う	14	31 **	4.84	13.78	6	19 **	8	12
					4.14	15.83	5.56	11.43
どちらかというと思う	76 **	26	26.30	11.56	38 **	15	38 **	11
					26.21	12.50	26.39	10.48
あまりそのように思わない	199	168	68.86	74.67	101	86	98	82
					69.66	71.67	68.06	78.10
計	289	225	100.00	100.00	145	120	144	105
					100.00	100.00	100.00	100.00

表5 しつけへの自信について

項目	性別		全 体		男 子		女 子	
	国 別		日	韓	日	韓	日	韓
自信がある	39	61 **	13.36	26.52	15	31	24	30 *
					10.20	25.00	16.55	28.30
どちらかといえば自信がある	110 **	61	37.67	26.52	60 *	33	50	28
					40.82	26.61	34.48	26.42
どちらかといえば不安である	126	94	43.15	40.87	64	55	62	39
					43.54	44.35	42.76	36.79
不安である	17	14	5.82	6.09	8	5	9	9
					5.44	4.03	6.21	8.49
計	292	230	100.00	100.00	147	124	145	106
					100.00	100.00	100.00	100.00



表7 子どもに対する満足度

項目	性 別		全 体		男 子		女 子	
	国 別		日	韓	日	韓	日	韓
十分満足	22	23	7.69	9.96	12	13	10	10
					8.33	10.48	7.04	9.35
太体において満足	167	145	58.39	62.77	75	77	92	68
					52.08	62.10	64.79	63.55
少し不満がある	91	59	31.82	25.54	55	31	36	28
					38.19	25.00	25.35	26.17
大いに不満がある	6	4	2.10	1.73	2	3	4	1
					1.39	2.42	2.82	0.93
計	286	231	100.00	100.00	144	124	142	107
					100.00	100.00	100.00	100.00

表8 子どもの将来への期待

項目	性 別		全 体		男 子		女 子	
	国 別		日	韓	日	韓	日	韓
親以上のものになってほしい	121	158 **	41.58	68.70	61	82 **	60	76 **
					41.78	67.21	41.38	70.37
能力相応のものでよい	119 **	65	40.89	28.26	62 *	36	57 *	29
					42.47	29.51	39.31	26.85
どちらとも言えない	51 **	7	17.53	3.04	23	4	28 **	3
					15.75	3.28	19.31	2.78
計	291	230	100.00	100.00	146	122	145	108
					100.00	100.00	100.00	100.00

両国の間に有意差は見られなかった。

6)子どもの将来への期待について：表8によると日・韓両方の母とも同じ傾向で「親以上のものになってほしい」が最も多く、次いで、「能力相応のものでよい」の順である。しかし、韓国の母は「親以上のもの」( $\chi^2 = 37.97, p < 0.00$ )が全体の半数以上を占め、日本より多く、日本の母は「能力相応」( $\chi^2 = 8.97, p < 0.01$ )「どちらとも言えない」( $\chi^2 = 27.23, p < 0.00$ )が韓国より多い。さらに、子どもの性別による両国の母の期待を比較して見ると、男子の場合、韓国の母が日本の母より、「親以上」( $\chi^2 = 17.27, p < 0.00$ )が多く、日本の母は韓国の母より「能力相応」( $\chi^2 = 4.28, p < 0.05$ )、「どちらとも言えない」( $\chi^2 = 15.74, p < 0.00$ )が多かった。このような結果は、男女合わせた全体の結果と同じ傾向である。

7)子どもの期待される学歴について：表9からわかるように、韓国の母は「4年制大学」がはるかに多く、次いで「大学院」「高等学校」の順であり、日本の方は「高等学校」が最も多く、次いで、「短期大学・専門学校」「4年制大学」の順である。なお、韓国の母は日本の母より「4年制大学」( $\chi^2 = 63.44, p < 0.00$ )、「大学

院」( $\chi^2 = 95.16, p < 0.00$ )が多く、日本の母は韓国の母より「高等学校」( $\chi^2 = 88.80, p < 0.00$ )「短期大学・専門学校」( $\chi^2 = 48.57, p < 0.00$ )が多かった。このような結果は、韓国における親の子どもの将来に対する期待がかなり高いこととあわせて考えると、当然の事と思われる。他方、日本の子どもの学歴に対する親の期待は能力相応の子どものよいと思うとする親が多いことと密接な関係があるように思われる。さらに、子どもの性別でみると、男子の場合、韓国の母の方が「4年制大学」( $\chi^2 = 4.63, p < 0.05$ )、「大学院」( $\chi^2 = 62.01, p < 0.00$ )を希望するものが多く、日本の母は韓国の母より「高等学校」( $\chi^2 = 32.08, p < 0.00$ )、「短期大学・専門学校」( $\chi^2 = 28.34, p < 0.00$ )を望むものが多い。一方、女子の場合も男子と同様に、韓国の母は日本の母より「4年制大学」( $\chi^2 = 91.27, p < 0.00$ )、「大学院」( $\chi^2 = 32.67, p < 0.00$ )を望むものが多く、日本の母は韓国の母より「高等学校」( $\chi^2 = 24.31, p < 0.00$ )、「短期大学・専門学校」( $\chi^2 = 31.63, p < 0.00$ )を望むものが多い。したがって、韓国の方が日本より、男女ともに高学歴を期待しており、「大学院」の場合、男子の方が女子より高い比率を示しているが、子どもの性別による差はない。日本の

表 9 期待される子どもの学歴

項 目	性 別		全 体		男 子		女 子	
	国 別		日	韓	日	韓	日	韓
義務教育	3	2	1.03	0.87	1	0	2	2
					0.69	0.00	1.38	1.87
高等学校	116 **	10	40.00	4.35	43 **	4	73 **	6
					29.66	3.25	50.34	5.61
短期大学・専門学校	89 **	9	36.69	3.91	35 **	2	54 **	7
					24.14	1.63	37.24	6.54
4年制大学	61	126 **	21.03	54.78	53	61	8	65 **
					36.55	49.59	5.52	60.75
大学院	1	68 **	0.34	29.57	1	46 **	0	22 **
					0.69	37.40	0.00	20.56
わからない	14	7	4.83	3.04	8	4	6	3
					5.52	3.25	4.14	2.80
そ の 他	6	8	2.07	3.48	4	6	2	2
					2.76	4.88	1.38	1.87
計	290	230	100.00	100.00	145	123	145	107
					100.00	100.00	100.00	100.00

表 10 基本方針の決定者

項 目	性 別		全 体		男 子		女 子	
	国 別		日	韓	日	韓	日	韓
父	23	53 **	7.93	22.94	13	24 *	10	29 **
					8.90	19.51	6.94	26.85
母	70	66	24.14	28.57	37	36	33	30
					25.34	29.27	22.92	27.78
父母が相談して	195 **	106	67.24	45.89	95 *	61	100 **	45
					65.07	49.59	69.44	41.67
祖父または祖母	1	4	0.34	1.73	1	2	0	2
					0.68	1.63	0.00	1.85
そ の 他	1	2	0.34	0.87	0	0	1	2
					0.00	0.00	0.69	1.85
計	290	231	100.00	100.00	146	123	144	108
					100.00	100.00	100.00	100.00

場合、男子には「4年制大学」「短期大学・専門学校」が多く、女子の場合「高等学校」「短期大学・専門学校」が多く、「4年制大学」はわずか5%しかない。したがって、日本の場合、女子より男子に高い学歴が必要であると思う母が多いようである。

8)教育方針の決定者について：表10からみるように、日・韓いずれの国においても、父母が相談して決めるのが最も多く、次いで、母・父の順である。しかし、韓国の母が日本の母より「父が決める」( $\chi^2=23.26$ ,  $p<0.00$ )が多く、日本の母は「父母が相談して決める」( $\chi^2=24.03$ ,  $p<0.00$ )が韓国より多い。子どものしつけや教育の基本方針は、両国ともに父母が相談してやるのが目立つが、日本の方がより父母が相談しているようで、韓国の

方が、父が決める場合が多いようである。両国とも、表4でみた様に、父権はあまり低下していなかったが、韓国の方がまだ、父の子どもへの関心(影響力)が大きいようである。表10によると、母が決める場合も少なくないようであり、これは、母に子どもの教育をまかせることでもあり、母の意見が強くなったことの反映でもある。ただし、従来の研究<sup>8)</sup>によると、父親は父に、母親は母に決定権があるとする傾向が見られ、この調査は母を対象としたことを考慮しておきたい。さらに、子どもの性別による違いを各項目ごとに比較すると、男女ともに、韓国の母が日本の母より「父が決める」(男： $\chi^2=6.33$ ,  $p<0.03$ , 女： $\chi^2=18.70$ ,  $p<0.00$ )が多く、日本の母は「父母が相談して」(男： $\chi^2=6.56$ ,  $p<0.03$ , 女：



表 11 しつけの場

項 目	性 別		全 体		男 子		女 子	
	国 別		日	韓	日	韓	日	韓
主として家が行うべき	151 **	16	51.71	6.90	81 **	12	70 **	4
					55.10	9.68	48.28	3.70
家庭と学校の双方で行うべき	139	216 **	47.60	93.10	64	112 **	75	104 **
					43.54	90.32	51.72	96.30
主として学校が行うべき	2	0	0.68	0.00	2	0	0	0
					1.36	0.00	0.00	0.00
そ の 他	0	0	0.00	0.00	0	0	0	0
					0.00	0.00	0.00	0.00
計	292	232	100.00	100.00	147	124	145	108
					100.00	100.00	100.00	100.00

表 12 父母間のしつけの一致度

項 目	性 別		全 体		男 子		女 子	
	国 別		日	韓	日	韓	日	韓
一致している	27	43 **	9.51	18.86	13	27 **	14	16
					9.15	22.31	9.86	14.95
大体一致している	188 **	130	66.20	57.02	96 **	64	92	66
					67.61	52.89	64.79	61.68
少しくいちがっている	65	48	22.89	21.05	32	29	33	19
					22.54	23.97	23.24	17.76
大きくいちがっている	4	7	1.41	3.07	1	1	3	6
					0.70	0.83	2.11	5.61
計	284	228	100.00	100.00	142	121	142	107
					100.00	100.00	100.00	100.00

$\chi^2=19.49, p<0.00$ ) が韓国より多かった。

9) しつけの場について：表11によると、韓国の母にはしつけの場として「家庭と学校」がはるかに多く、次いで「主として家」になり、日本の母には「主として家」が最も多く、次いで「家庭と学校」である。なお、日本の母が韓国の母より「家が行うべき」( $\chi^2=119.59, p<0.00$ ) が多く、韓国の母は日本の母より「家庭と学校」( $\chi^2=122.50, p<0.00$ ) が多かった。日・韓いずれにおいても、しつけの場として家庭と学校が重視されているが、日本の方が、しつけは主として家で行うべきであると考えている親が多い反面、韓国では学校と家庭の双方で行うべきであると考えている。したがって、韓国の方が日本より、学校の先生や学校教育を信頼しているといえるが、他方、子どものしつけなど、家庭教育の面を学校にまかせるということにもなるだろう。なお、牛島<sup>7)</sup>は西欧と日本の家庭教育を比べながら、「日本は第二次大戦後、家族制度や家族的な考え方は、すべて封建主義の名のもとに排斥され、家を中心とした道徳はくつがえされる一方、学校制度が急激に整備されてきた。

そして、親も子ども学校教育に大きな期待をかけ、また、子どもを学校へあげることによって、子どもの教育権が家庭から学校へ移ってしまう」ことを指摘している。このようなことを考えると、韓国の方が日本より、もっと学校に、子どものしつけ、生活指導の期待をかけているようである。さらに、子どもの男女別にみると、男女ともに、韓国の母は日本の母より「家庭と学校の双方」(男： $\chi^2=64.67, p<0.00$ , 女： $\chi^2=59.42, p<0.00$ ) で多く、日本の母は韓国の母より「家が行うべきである」(男： $\chi^2=140.98, p<0.00$ , 女： $\chi^2=59.42, p<0.00$ ) で多かった。

10) 父母間のしつけの一致について：父母間のしつけの一致について調べた結果は表12の通りである。日・韓いずれの国においても「大体一致している」がはるかに多く、全体の項目を「一致する」と「不一致」の2つに分けると、日・韓両方とも「一致する」のが、全体の75%以上を占めている。しかし、韓国の母が日本の母より「一致する」( $\chi^2=9.37, p<0.01$ ) が多く、日本の母は韓国の母より「大体一致する」( $\chi^2=4.53, p<0.05$ ) で

表 13 賞 罰

項 目	性 別		全 体		男 子		女 子	
	国 別		日	韓	日	韓	日	韓
ほめることが多い	55	77 **	19.10	33.48	27	43 **	28	34 *
					18.75	35.25	19.44	31.48
しかることが多い	193 *	131	67.01	56.96	95	69	98	62
					65.97	56.56	68.06	57.41
そ の 他	40	22	13.89	9.57	22	10	18	12
					15.27	8.20	12.50	11.11
計	288	230	100.00	100.00	144	122	144	108
					100.00	100.00	100.00	100.00

表 14 体 罰

項 目	性 別		全 体		男 子		女 子	
	国 別		日	韓	日	韓	日	韓
いいえ	71	50	24.32	21.55	43 **	23	28	27
					29.25	18.55	19.31	25.00
はい、ときどき	214	180	73.29	77.59	100	100 *	114	80
					68.03	80.65	78.62	74.07
はい、いつも	7	2	2.40	0.86	4	1	3	1
					2.72	0.81	2.07	0.93
計	292	232	100.00	100.00	147	124	145	108
					100.00	100.00	100.00	100.00

多かった。しつけの方針を決めるのが誰にあるにせよ、子どもに対するしつけに関して、父母の間の意見が一致するのは、子どもの人格形成にとって望ましいことはいうまでもない。姫岡らの研究<sup>9)</sup>によると、しつけについて一致すると答えた者の比率は、夫婦の間の勢力分布が平等型に最高であり、夫優位型、夫強優位型、妻優位型の順を示し、妻強優位型において最低であると述べている。さらに、子どもの性別でみると、男子の場合、日本の母が韓国の母より「大体一致している」( $\chi^2=8.05$ ,  $p<0.01$ )が多く、韓国の母は日本の母より「一致している」( $\chi^2=8.77$ ,  $p<0.01$ )で多い。したがって、男子の場合、日・韓とも一致することが多いが、韓国の母がより一致しているといえる。女子の場合、両国の親の間に有意差はなかった。

11)賞罰について：社会の道徳を子どもに内面化させるには、子どもの衝動を抑制して条件づけを必要とするが、その代表的な方法としての賞罰を調べた。表13がその結果である。日・韓のいずれの国においても「しかる」が最も多く、次いで「ほめる」「その他」の順である。そして、韓国の母が日本の母より「ほめる」( $\chi^2=13.93$ ,  $p<0.00$ )が有意に多く、日本の母は韓国の母より「し

かる」( $\chi^2=5.52$ ,  $p<0.03$ )が多い。しかし、両国ともしかることが多いようであり、昭和55年度総理府青少年対策本部の家庭のしつけに関する調査<sup>10)</sup>では「しかる」方法を多く用いるのは、男子児童の母、若い母、学歴の低い母、家事に専念したり、内職をしている母である。逆に、比較的「ほめる」ことが多いのは、女子児童の母、対象となる子どもが末っ子の母、年齢の高い母、学歴の高い母、定職を持っている母であると述べている。さらに、子どもの性別でみると、男女ともに、韓国の母が日本の母より「ほめる」(男： $\chi^2=9.27$ ,  $p<0.01$ , 女： $\chi^2=4.82$ ,  $p<0.03$ )ことが多い。

12)体罰について：しつけの仕方の実態を知ることのできる具体的行動形式として、親が子どもに対して、体罰を与えるかどうかを調べた。その結果は表14の通りである。日・韓のどちらの国においても「ときどき体罰を用いる」のが最も多く、次いで「用いない」「いつも用いる」の順である、両国の間で有意差はなく、両方の親は、体罰をときどき用いることが明らかである。さらに、子どもの性別でみると、男子の場合、日本の母が韓国の母より「体罰を用いない」( $\chi^2=9.27$ ,  $p<0.01$ )が多く、韓国の母は「ときどき用いる」( $\chi^2=5.54$ ,

$p<0.03$ ) が日本の母より多い。しかし、女子については、日・韓の両国の間で有意差はなかった。

### Ⅲ-2. 子どもの認知した親子関係について

結果をTK式検査法に準じて、10項目の親の態度ごとに平均得点を算出した。これによって、以下子どもの性別、年齢別の条件を加えて、日・韓比較を試みる。

子どもの認知した日・韓両国の態度の平均得点は表15

表15 子どもの認知した日・韓両国の親の態度

親子関係	親	日 本(293人)		韓 国(234人)		危険率
		$\bar{X}$	S D	$\bar{X}$	S D	
不 満	父 母	10.81 10.86	2.98 2.48	11.55 11.56	3.51 2.48	0.01 0.00
非 難	父 母	10.84 10.54	3.21 2.74	11.05 10.67	3.47 2.48	0.47 0.58
厳 格	父 母	10.47 10.25	3.07 2.44	9.93 9.96	3.16 2.41	0.05 0.18
期 待	父 母	10.09 9.29	3.36 2.84	8.21 7.88	3.13 2.42	0.00 0.00
干 渉	父 母	10.84 9.99	3.18 2.67	9.34 9.00	3.30 2.56	0.00 0.00
心 配	父 母	9.75 8.63	3.32 2.83	7.53 7.27	3.13 2.50	0.00 0.00
溺 愛	父 母	10.89 10.75	3.23 2.53	8.65 8.84	3.32 2.50	0.00 0.00
盲 従	父 母	11.31 11.46	3.22 2.52	8.29 8.78	3.09 2.29	0.00 0.00
矛 盾	父 母	10.12 10.13	3.03 2.56	8.66 8.90	2.97 2.35	0.00 0.00
不一致	父 母	10.46 10.32	3.05 2.77	10.59 11.20	3.40 2.44	0.63 0.00

$\bar{X}$  : 平均  
S D : 標準偏差  
以下同じ

の通りである。全体の傾向として、両国間に有意な差を示した親の態度をとりあげると、父の態度では不満に、母の態度では不満、不一致に、日本より韓国の方に、よりポジティブな傾向がみられた。これに対し、日本の子どもは韓国の子どもより、父の厳格、父母の期待、干渉、心配、溺愛、盲従、矛盾の項目にポジティブな評価をしている。なお、次に、子どもの性別による違いがみられるかどうかを検定した。まず、日本における男女別の親子関係は表16の通りである。有意な差を認めたものについて、男子は女子より父の盲従、母の溺愛、盲従の態度にポジティブな傾向がみられた。これに対し、女子は男子より父の非難の態度にポジティブな傾向がみられた。以上、男女間に大きな違いを示すものは少なかったが、

表16 性別でみる日本における子どもの認知した親の態度(日本)

親子関係	親	男 子(148人)		女 子(145人)		危険率
		$\bar{X}$	S D	$\bar{X}$	S D	
不 満	父 母	10.73 11.10	3.08 2.47	10.90 10.61	2.89 2.47	0.63 0.09
非 難	父 母	10.45 10.62	3.35 2.73	11.23 10.46	3.01 2.76	0.04 0.60
厳 格	父 母	10.12 10.28	3.27 2.50	10.82 10.21	2.83 2.38	0.05 0.83
期 待	父 母	9.83 9.15	3.42 2.72	10.35 9.44	3.28 2.96	0.19 0.38
干 渉	父 母	10.72 10.14	3.27 2.71	10.97 9.84	3.10 2.63	0.52 0.35
心 配	父 母	10.12 8.95	3.36 2.87	9.37 8.31	3.24 2.77	0.06 0.06
溺 愛	父 母	11.22 11.08	3.25 2.58	10.56 10.42	3.19 2.44	0.08 0.03
盲 従	父 母	11.69 11.79	3.38 2.54	10.93 11.12	3.02 2.46	0.04 0.02
矛 盾	父 母	10.09 10.32	3.18 2.54	10.15 9.93	2.89 2.58	0.87 0.20
不一致	父 母	10.47 10.18	3.11 2.77	10.44 10.47	3.00 2.77	0.93 0.38

表17 性別でみる韓国における子どもの認知した親の態度(韓国)

親子関係	親	男 子(125人)		女 子(109人)		危険率
		$\bar{X}$	S D	$\bar{X}$	S D	
不 満	父 母	11.66 11.62	3.23 2.47	11.43 11.48	3.83 2.50	0.63 0.65
非 難	父 母	10.93 10.74	3.09 2.46	11.19 10.59	3.87 2.50	0.57 0.65
厳 格	父 母	9.99 10.27	2.84 2.41	9.85 9.60	3.50 2.37	0.74 0.03
期 待	父 母	8.28 8.08	2.98 2.50	8.12 7.64	3.30 2.31	0.70 0.17
干 渉	父 母	9.38 8.87	3.22 2.53	9.29 9.14	3.41 2.59	0.84 0.43
心 配	父 母	7.89 7.37	3.13 2.54	7.12 7.15	3.09 2.47	0.06 0.50
溺 愛	父 母	9.25 9.05	3.21 2.45	7.96 8.61	3.34 2.56	0.00 0.18
盲 従	父 母	8.93 9.11	2.95 2.39	7.57 8.40	3.05 2.12	0.00 0.02
矛 盾	父 母	8.76 8.95	2.76 2.38	8.54 8.83	3.20 2.32	0.58 0.70
不一致	父 母	10.98 11.16	3.26 2.68	10.16 11.25	3.51 2.15	0.07 0.78

有意でないものを加えて、全体の傾向から、男子は女子に比べ、彼らの父親より母親とポジティブな親子関係を

持っていること認知し、女子は母親より父親ともしっかりとした親子関係を示す方向があることは興味深い。次に、韓国における男女別親子関係の結果を表17から見ると、男子が女子より、父の溺愛、盲従の態度、母の厳格、盲従の態度にポジティブな傾向がみられた。したがって、全体的な傾向としては、男子が女子より、父母ともに対してよりポジティブな親子関係を持っているようであり、この傾向は日本の場合と必ずしも同じでなかった。次に、子どもの性別によって、日・韓の比較を試みた。表18の結果が得られた。まず、男子の場合、父の不満、母の不一致の態度に、韓国の子どものほうが日本の子どもよりポジティブな傾向があり、父母の期待、干渉、心配、溺愛、盲従、矛盾の態度には、日本の子どものほうが韓国の子どもよりポジティブな傾向がみられた。さらに、女子の場合では、不満、非難、不一致の態度を除いたすべての項目の態度において、日本の子どものほうが韓国の子どもよりポジティブな傾向を示した。しかし、母の不満、不一致の態度には韓国の子どものほうが日本の子どもよりポジティブな傾向を示した。このように、性別による検討の結果も、全体の結果にほぼ近い結果がうかがえる。

TK式検査は、小学生高学年に対しては特に、学年によって区別しないで実施することになっているが、本調

査の結果を4, 5, 6年別にまとめ、子ども学年別親子関係による日・韓比較を行なった結果は、表19の通りである。まず、4年生の場合、父の不満、母の非難、父母の期待、干渉、心配、溺愛、盲従、矛盾、母の不一致の態度に有意な差がみられ、父の不満、母の非難、母の不一致の態度に、韓国の子どものほうが日本の子どもよりポジティブな傾向があり、その他の項目においては、父母ともに日本の子どものほうが韓国の子どもよりポジティブな傾向がみられた。5年の場合、不満、非難、不一致を除いたすべての項目の父母の態度に有意差がみられ、日本の子どものほうが韓国の子どもよりポジティブな傾向がみられた。6年の場合も、非難、厳格を除いた項目に有意差がみられ、母の不満、不一致の態度は、韓国の子どものほうが日本の子どもよりポジティブであるが、その他の項目においては、日本の子どものほうが韓国の子どもよりポジティブであった。学年別による結果も、全体の結果にほぼ近い結果がうかがえる。

### Ⅲ-3. 子どもの心理社会的特性について

子どもの心理社会的特性を調べた結果は表20の通りである。なお、統計的検定はt検定により、これらの各態度得点の人数分布は、すべて正規分布を示していた。心理社会的特性のそれぞれの内容ごとに、日・韓比較を試

表18 性別でみる日・韓における子どもの認知した親の態度

親子関係	親	男 子				危険率	女 子				危険率
		日 (148人)		韓 (125人)			日 (145人)		韓 (109人)		
		$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD		$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD	
不 満	父 母	10.73	3.08	11.66	3.23	0.02	10.90	2.89	11.43	3.83	0.22
		11.10	2.47	11.62	2.47	0.08	10.61	2.47	11.48	2.50	0.01
非 難	父 母	10.45	3.35	10.93	3.09	0.22	11.23	3.01	11.20	3.87	0.93
		10.62	2.74	10.74	2.46	0.72	10.46	2.76	10.59	2.50	0.69
嚴 格	父 母	10.12	3.27	9.99	2.84	0.73	10.83	2.82	9.85	3.50	0.02
		10.28	2.50	10.27	2.41	0.99	10.21	2.38	9.60	2.37	0.04
期 待	父 母	9.83	3.42	8.28	2.98	0.00	10.35	3.28	8.12	3.30	0.00
		9.15	2.72	8.08	2.50	0.00	9.44	2.96	7.64	2.31	0.00
干 渉	父 母	10.72	3.27	9.38	3.22	0.00	10.97	3.10	9.29	3.41	0.00
		10.14	2.71	8.87	2.53	0.00	9.84	2.63	9.14	2.59	0.03
心 配	父 母	10.12	3.36	7.90	3.13	0.00	9.37	3.24	7.12	3.09	0.00
		8.95	2.87	7.37	2.53	0.00	8.31	2.77	7.15	2.47	0.00
溺 愛	父 母	11.22	3.25	9.25	3.21	0.00	10.56	3.19	7.96	3.34	0.00
		11.08	2.58	9.05	2.45	0.00	10.42	2.44	8.61	2.56	0.00
盲 従	父 母	11.69	3.38	8.93	2.95	0.00	10.93	3.02	7.57	3.05	0.00
		11.79	2.54	9.11	2.39	0.00	11.12	2.46	8.40	2.12	0.00
矛 盾	父 母	10.09	3.18	8.76	2.76	0.00	10.15	2.89	8.54	3.20	0.00
		10.32	2.54	8.95	2.38	0.00	9.93	2.58	8.83	2.32	0.00
不一致	父 母	10.47	3.11	10.98	3.26	0.20	10.44	3.00	10.16	3.51	0.50
		10.18	2.77	11.16	2.68	0.00	10.47	2.77	11.25	2.15	0.01



表19 学年別でみる日・韓における子どもの認知した親の態度

親子関係	親	4 年				危険率	5 年				危険率	6 年				危険率
		日 (108人)		韓 (75人)			日 (92人)		韓 (73人)			日 (93人)		韓 (86人)		
		$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD		$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD		$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD	
不 満	父 母	10.53	2.59	11.64	2.89	0.01	10.70	3.68	11.48	3.92	0.19	11.26	2.60	11.54	3.68	0.56
		10.54	2.52	11.23	2.69	0.08	11.19	2.40	11.58	2.37	0.30	11.00	2.50	11.83	2.37	0.01
非 難	父 母	11.22	3.01	11.99	3.07	0.10	10.19	3.72	10.50	3.80	0.60	11.03	2.79	10.71	3.38	0.49
		10.65	2.93	11.55	2.49	0.03	10.42	2.63	10.04	2.34	0.32	10.53	2.66	10.43	2.39	0.80
厳 格	父 母	11.15	2.96	10.47	2.75	0.11	9.66	3.38	9.11	3.31	0.04	10.47	2.70	10.15	3.56	0.48
		10.65	2.74	10.48	2.52	0.70	9.85	2.37	9.14	2.15	0.05	10.19	2.07	10.20	2.37	0.99
期 待	父 母	10.72	3.16	8.84	3.03	0.00	9.35	3.79	7.77	3.21	0.00	10.08	2.98	8.02	3.09	0.00
		9.80	2.86	8.40	2.16	0.00	9.67	2.85	7.47	2.19	0.00	8.94	2.76	7.77	2.37	0.00
干 渉	父 母	11.71	2.88	10.21	3.41	0.00	10.09	3.68	8.88	3.31	0.03	10.58	2.76	8.98	3.11	0.00
		10.82	2.91	9.60	2.88	0.01	9.64	2.60	8.62	2.37	0.01	9.38	2.20	8.80	2.35	0.09
心 配	父 母	10.48	3.07	8.43	3.15	0.00	8.67	3.67	7.00	3.01	0.00	9.96	2.79	7.20	3.08	0.00
		9.38	2.91	7.79	2.64	0.00	8.20	2.90	7.10	2.44	0.01	8.19	2.52	6.95	2.38	0.00
溺 愛	父 母	11.63	2.85	9.47	3.37	0.00	9.75	3.64	8.21	3.33	0.01	11.17	2.92	8.31	3.19	0.00
		11.45	2.51	9.07	2.84	0.00	10.39	2.28	8.66	2.47	0.00	10.30	2.64	8.80	2.22	0.00
盲 従	父 母	11.89	3.08	8.75	2.95	0.00	10.45	3.60	7.68	3.05	0.00	11.50	2.82	8.42	3.14	0.00
		11.81	2.60	8.68	2.56	0.00	11.23	2.42	8.50	2.30	0.00	11.22	2.49	9.12	2.01	0.00
矛 盾	父 母	10.48	2.65	9.28	2.80	0.00	9.50	3.73	8.22	3.16	0.02	10.30	2.60	8.49	2.89	0.00
		10.27	2.62	9.33	2.55	0.02	10.05	2.60	8.38	2.28	0.00	10.03	2.48	8.96	2.14	0.00
不一致	父 母	10.83	2.76	11.32	3.12	0.28	9.98	3.55	9.90	3.50	0.90	10.50	2.80	10.56	3.45	0.91
		10.35	3.01	11.35	2.53	0.02	10.36	2.80	10.71	2.26	0.40	10.26	2.46	11.49	2.48	0.00

表20 日・韓両国の子どもの心理社会的特性

項目	国別 得点	日 (293人)		韓 (234人)		危険率
		$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD	
社 会 性		7.60	1.48	6.94	1.44	0.00
自 立 性		7.08	1.59	7.48	1.57	0.00
攻 撃 性		8.64	1.84	8.84	1.79	0.21
集団への参加		7.00	1.49	6.73	1.52	0.04
自 発 性		7.41	1.66	6.73	1.61	0.00
自己統制		7.42	1.67	7.10	1.59	0.03
公 共 心		7.01	1.42	6.73	1.57	0.03

みたところ、攻撃性以外の他の内容に有意な差が認められた。すなわち、社会性、自立性、集団への参加、自発性、自己統制、公共心に有意な差があり、自立性を除いた全ての項目については、韓国の子どもによりポジティブな傾向がみられた。しかし、自立性の項目では日本の子どもが韓国の子どもよりポジティブな結果を示している。したがって、全体として韓国の子どもが日本の子どもより心理社会的特性において、よりポジティブであるといえそうである。次に、子どもの性別による違いを検定し

表21 日本における性別子どもの心理社会的特性

項目	国別 得点	男子(148人)		女子(145人)		危険率
		$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD	
社 会 性		7.64	1.56	7.57	1.39	0.66
自 立 性		7.24	1.60	6.92	1.57	0.08
攻 撃 性		8.65	1.71	8.63	1.98	0.95
集団への参加		7.28	1.39	6.72	1.54	0.00
自 発 性		7.71	1.67	7.10	1.60	0.00
自己統制		7.68	1.76	7.17	1.54	0.01
公 共 心		7.16	1.50	6.86	1.33	0.08

た。表21は、日本の子どもの場合であり、若干の有意な差を認めた。すなわち、集団への参加、自発性、自己統制の面に、女子が男子より有意な差がありポジティブであるといえる。次いで、韓国の場合は、表22の通りであるが、公共心のみに有意な差がみられ、女子より男子がポジティブである。これは、日本の子どもの性別による違いと異なった傾向であり、日本では女子が男子よりポジティブである反面、韓国では公共心の項目において男子が女子よりポジティブである。以上の傾向を直接、日・

表 2 2 韓国における性別子どもの心理社会的特性

項目	性別 得点	男子(125人)		女子(109人)		危険率
		$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD	
社 会 性		6.95	1.56	6.94	1.29	0.93
自 立 性		7.49	1.58	7.48	1.57	0.96
攻 撃 性		8.98	1.90	8.68	1.64	0.19
集団への参加		6.67	1.63	6.79	1.39	0.56
自 発 性		6.70	1.69	6.75	1.51	0.82
自 己 統 制		7.03	1.75	7.18	1.39	0.46
公 共 心		6.52	1.61	6.96	1.49	0.03

表 2 3 日・韓における性別子どもの心理社会的特性

項目	性別 得点	男 子				危 険 率	女 子				危 険 率			
		日(148人)		韓(125人)			日(145人)		韓(109人)					
		日(148人)	韓(125人)	日(145人)	韓(109人)		日(145人)	韓(109人)						
		$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD		$\bar{X}$	SD	$\bar{X}$	SD		$\bar{X}$	SD	
社 会 性		7.64	1.56	6.95	1.56	0.00	7.57	1.39	6.94	1.29	0.00			
自 立 性		7.24	1.60	7.49	1.58	0.21	6.92	1.57	7.48	1.57	0.01			
攻 撃 性		8.65	1.71	8.98	1.90	0.13	8.63	1.98	8.68	1.64	0.85			
集団への参加		7.28	1.39	6.67	1.63	0.00	6.72	1.54	6.78	1.39	0.70			
自 発 性		7.71	1.67	6.70	1.69	0.00	7.10	1.60	6.75	1.51	0.08			
自 己 統 制		7.68	1.76	7.03	1.75	0.00	7.17	1.54	7.18	1.39	0.92			
公 共 心		7.16	1.50	6.52	1.61	0.00	6.86	1.33	6.96	1.49	0.58			

韓の両国の同性の子どもと比較した結果が表23である。まず、男子について、両国間に有意な差を示した項目をとりあげると、社会性、集団への参加、自発性、自己統制、公共心であり、すべての態度について韓国の子ども

によりポジティブな傾向がみられた。さらに、女子の場合では、社会性、自立性に有意差がみられ、社会性の側面は韓国の子どもに、自立性の側面は日本の子どもに、よりポジティブな傾向がみられた。したがって、男子の場合は、韓国の子どもが日本の子どもより心理社会的特性の面においてポジティブであり、女子の場合は、両国の間にあまり差がないようである。この結果は、日本の男子の心理社会的特性の面がネガティブである傾向を示すものであるが、ここでは、その理由は明らかでない。

さらに、学年別子どもの心理社会的特性による日・韓比較の結果は表24の通りである。まず、4年の場合、社会性、自発性に有意差が見られ、韓国の子どもに、よりポジティブな傾向が見られた。5年生の場合、社会性において韓国の子どもがよりポジティブであり、6年生においては、攻撃性、集団への参加を除いたすべての項目に有意差がみられ、自立性の側面は日本の子どもによりポジティブな傾向がみられ、その他の項目では、韓国の子どもが日本の子どもよりポジティブであった。このように、学年別による検討の結果も、全体の結果にはほぼ近い結果であるが、6年生において日・韓間に有意に大きな差がみられた。学年が高くなるにつれて両国間の子どもの心理社会的特性の側面に違いがみられることは、さらに、より成長する時、どういう違いに変化するのか興味深い。

#### IV. 考察と今後の課題

これまで、日・韓両国の養育観、養育態度と子どものパーソナリティの心理社会的側面を具体的なデータでみてきたが、ここでは、紙面の都合上、もっとも重要と思われる知見をとりあげ考察してみたいと思う。

表 2 4 日・韓における学年別子どもの心理社会的特性

項目	学年別 得点	4 年				危険率	5 年				危険率	6 年				危険率
		日(108人)		韓 (75人)			日 (92人)		韓 (73人)			日 (93人)		韓 (86人)		
		$\bar{X}$	S D	$\bar{X}$	S D		$\bar{X}$	S D	$\bar{X}$	S D		$\bar{X}$	S D	$\bar{X}$	S D	
社 会 性		7.59	1.56	7.11	1.62	0.04	7.54	1.36	6.89	1.36	0.00	7.68	1.50	6.85	1.34	0.00
自 立 性		6.86	1.61	7.09	1.90	0.39	7.24	1.43	7.51	1.36	0.22	7.18	1.70	7.80	1.36	0.01
攻 撃 性		8.64	1.86	8.97	1.93	0.24	8.75	1.89	8.64	1.73	0.71	8.54	1.79	8.90	1.71	0.17
集団への参加		7.05	1.54	6.73	1.68	0.20	6.87	1.39	6.73	1.39	0.51	7.08	1.53	6.72	1.51	0.12
自 発 性		7.63	1.83	6.88	1.68	0.01	7.20	1.54	6.88	1.35	0.16	7.35	1.55	6.47	1.72	0.00
自 己 統 制		7.43	1.62	7.08	1.90	0.20	7.05	1.73	7.45	1.41	0.11	7.78	1.61	6.83	1.38	0.00
公 共 心		6.91	1.35	6.84	1.88	0.79	6.89	1.54	6.68	1.27	0.35	7.25	1.36	6.66	1.52	0.01

まず、母親による理想的な子ども像についてであるが、日本の場合は「情操の豊かな子」「約束やきめたことはしっかり守る子」「勤労を尊ぶ子」などの項目によって特徴づけられた。それに対して、韓国の場合は「独立心・自主性に富んだ子」「創造力に富む子」などの項目によって特徴づけられた。

何にゆえに、両国の理想的な子ども像が、この様なかたちであらわれてきたのだろうか。その理由はいろいろあるかも知れないが、そのなかでも最も大きな理由として考えられるのは、両国の歴史と文化の違いである。韓国の歴史を見ると、昔から外勢の侵入が多かった。ことに、現在は、同じ民族が分断されている状態である。韓国で理想的な子ども像として「独立心・自主性の富んだ子」が第1位にきているのは、このような韓国の歴史が反映されているようである。すなわち、名実ともにより強硬な国家を創っていくための社会意識が大多数の韓国民のなかに存在していて、しかもそれが、ひとつの文化的エトスとなっているからだと思われる。ところで、どうして日本の社会の理想的な子ども像が「情操の豊かな子」とか「約束や決めたことをしっかり守る子」という項目で特徴づけられるようになったであろうか。おそらくそれは、「豊かさの中の貧困」と呼ばれるような社会の構造的側面と関連があるであろう。日本は自由主義経済社会のなかでは、まさしく経済大国になった。つまり、物質的な生活は豊かになった。しかし、日本人は物中心的価値と個人主義的価値が相乗作用をおこしながら強化されるなかで「心の豊かさ」を失いつつある。家庭内暴力や校内暴力が多発しているのも、そのひとつの現われであろう。「情操の豊かな子」「約束やきめたことを守る子」が理想像として現われてきた背景には、上述のような「豊かさの中の貧困」が、ひとつの文化特性として密接にからんでいるように思われる。上述の考察が正しいとするならば、韓国の場合、現在分断されている同一民族による2つの国家が統一されて、完全に独立したあかつきには、理想とする子ども像も、やや異なってくるであろう。独立・自主は、現在の韓国の国家的テーマであり、そのことが、期待される子どもの理想像にも反映している様に思われる。

この様な韓国の人々の国家的同一化の強さは、「人生目標」を何におくか、ということにも如実にあらわれている。つまり韓国の場合は、「国家・社会のためにすべてをささげてくらす」項目で日本をはるかにしのいでおり、如何に国家と国民とが一体化しているかがうかがわれる。一般に、国家建設の基盤作りのためには、戦略的に個人主義よりもナショナリズムを優先させることが必

要であると言われるが、韓国は現在、まさにこの過程にあるとみることが出来よう。しかし、このナショナリズムが硬直した場合、かつての日本がそうであった様に、国家エゴに陥り、国家のために個人が生命を捨ててしまうという不幸な現象が起ってくる危険性がある。したがって、将来においては、国家や社会を目的化するのではなく、むしろ、国家や社会を国民ひとりびとりの自己実現のための、ひとつの手段にしていけることが必要であろう。

次に、「しつけでみる不安の内容」という視点から両国を比較すると、日本においては「子どものしつけや教育について自信をもてない」と「子どもの非行化」などの点において有意差がみられるほど頻度が高かった。

しかし、韓国の場合は「子どもの教育についての情報や相談について」の項目において、頻度が高かった。

以下、この点について若干の考察を加えておきたい。

まず、日本側の「子どもの教育やしつけについて自信を持ってないこと」が相対的に多いのは、日本の価値体系の多様化と関係がある様に思われる。たとえば「しつけの仕方」ひとつをとりあげても、ある識者はスパルタ方式のしつけを強調し、また、ある識者はそれとは反対に、感情受容的態度でのぞむことを強調する。結局、これらの矛盾した情報が、発達したマスコミを通して流されてきた場合、しつけの担当者である母親が動揺するのは当然であろう。しかし、その場合でもしつけについての矛盾した情報を主体的に選別できる能力が母親側に用意されておれば、しつけや教育について自信を無くしてしまうという危機を解決することができる。

この様にみえてくると、どの様にすれば、情報の多様化した、あるいは価値体系が多様化した社会のなかで、母親が情報を取捨選択し判断能力を高めていくことが出来るかが、しつけの達成課題になる。しかし、この課題達成は、理論的に考えて、大変むずかしいように思える。なぜならば、情報の多様化は技術革新によって促進され、とめようとすることが出来ない。また、個人はその社会によって大きく規定されるからである。したがって、多様化した価値体系をもつ社会のなかでは、ひとつの価値体系に適応することが結果的に、いまひとつの価値体系に対しては不適応を引き起こすことになるので、主体的な判断能力の育成が極めて困難になってくる。

データでは、韓国の母親が日本の母親に比較して、子どものしつけと教育について「自信」を持っていたが、このことは、韓国の社会が日本の社会に比較して、情報や価値体系の面でより伝統的で、かつ単一化していることと関係があり、そしてそれを反映するかたちで、しつ

けの目標、しつけの方法、しつけの担い手などの点においても、比較的一元化していることと関係がある。もし、韓国がこれからも、近代化の技術と切っても切り離すことのできない文化的価値体系、たとえば、「合理主義」と「個人主義」などを導入していくとするならば、これらの価値体系は、しつけの目標を「親孝行」「家名を尊重する」「先祖崇拝」「国家のためにつくす」などにおく韓国の儒教主義的しつけ観を崩壊させ、ひいては、現存の日本の母親が直面している問題に直面するであろう。その意味では、韓国の母親が日本の母親に比較して依然として、子どものしつけや教育に自信を持ち続けているということは、社会変動論の視点から見ると、韓国の前近代的な社会構造の反映であると言って過言ではなからう。

次に、子どもの認知した親子関係について考察してみたい。データーによれば、日本の子どもの方が韓国の子どもよりも、親が子どもに対してより大きな不満をもっていると思っており、また、父母により大きな不一致があると思っている。それに対して韓国の子どもは、親の子どもに対する態度を「厳格」「期待」「矛盾」などの特性で特徴づけている。このような、子どもによる親子関係の認知の違いが、なぜ生じてきたのだろうか。いろいろの事が関与していると思われるが、日本の子どもによる親の養育態度の認知が「不満」と「両親間の不一致」の項目によって特徴づけられたのは、データーでみる限り、母親の養育態度と密接な関係がある様に思われる。紙面の都合上データー提示を割愛したが、この割愛したデーターによれば、日本の母親は、子どもが何かわるいことをした場合、子どもが納得するまで注意するのではなく、むしろ半ば無意識的にそれを許容する一方、他方では「父親に注意してもらう」という両価的態度をとる傾向が比較的強く、そのことが子どもの「両親間の不一致」という認知形成に影響を与えている様に思われる。また、親が「不満」に思っているとする子どもの認知は、子どもがわるいことをしたとき、日本の母親の特徴的な養育態度、つまり「愛情をひっこめる行為」「子どもを無視する行為」と関係がある様に思われる。それに対して、韓国の子どもが認知している親の態度、つまり「溺愛」「盲従」は、韓国の母親が、日本の母親以上に、子どもに「特権を与えたり」「お金を与えたり」する養育行為と関係があり、同じく韓国の子どもが認知している親の「期待」「干渉」「心配」は、韓国の親が子どもの能力以上に高学歴などを期待していることと関係がある様に思われる。なぜならば、韓国の母親は、日本の母親よりも子どもに「高学歴」と「名をあげる」ことを期待

しており、それに対して、日本の母親は韓国の母親よりも「自分の趣味にあった生き方」を求め、しかもその差は、統計学的に有意になっているからである。結局、母親の養育態度をめぐる子どもの認知は、上述のような親の態度と関係があるといっても過言ではなからう。とは言っても、これはあくまでも実証を要するひとつの命題（仮説）であり、今後、クロス分析を通して検証されることが必要であろう。

最後に、子どものパーソナリティの心理社会的側面である。「社会性」「集団への参加意識」「自発性」「自己統制」および「公共心」が、韓国の子どもの方に、相対的に強く現われていたことについてであるが、その理由は次の様に考えられる。韓国の子どもたちが、自立や独立の国家のための文化的価値体系、あるいは政治、教育、経済制度に対して、より強く同一化するように、家庭、学校、社会において教育されていることと関係があるように思われる。韓国の子どもたちに相対的に強くあらわれた上述の心理社会的特性は、潜在的に子どもたちの自己実現（self-actualization）を達成する機能をもっているといえる。しかし、それらがナショナリズムと合体する場合、国家奉仕のための手段になるおそれがあると思われる。したがって、これが事実だとするならば、心理社会的特性のもつ意味や役割は、社会体制や社会構造が異なれば、それに対応するかたちで異なってくるとも言える。その意味で、上述の韓国の子どもの心理社会的特性が、自己実現のためになるような社会的諸条件をそろえていくことが必要であろう。

以上、われわれは、研究知見にいくつかをとりあげて考察してきたが、これらの考察はすべて仮説性をもっており、何らかのかたちで検証を必要としていることは言うまでもない。今後は、この仮説性をもった考察を作業仮説に設定し分析を深めていく同時に、本論文の基本的命題、つまり、「親の養育観・養育態度」そして、「子どものパーソナリティは、その民族文化によって規定される」を、調査対象を拡大して研鑽していきたいと思う。

#### ＜追記＞

本論文は、洪 上旭の修士論文に、本村 汎が訂正、削除、加筆したものである。問題意識と考察は本村の執筆によるものであり、方法と結果は洪によるものである。

注1) 親を対象にした調査を、本論文では親の養育観として表現する。

注2) TKR式診断的新親子関係検査<財団法人 田中教育研究所編>



- 注3) Burgess, E.W. and H.J.Locke, *The Family: From Institution to Companionship*, American Book Company, 1950. pp.209~330
- 注4) MMPI (Minnesota Multiphasic Personality Inventory) ミネソタ多面人格目録検査, 本論では日本版MMPI使用。
- 注5) Hess, R.D. 柏木恵子, 東 洋, 『母親の態度・行動と子どもの知的発達, 日・米比較研究』 東京大学出版会, 1981. pp. 84 ~ 88
- 注6) 総理府青少年対策本部編 『国際比較, 日本の子

- 供と母親』 大蔵省印刷局, 1981. pp. 75~81
- 注7) 牛島義友, 『西欧と日本の人間形成』 金子書房, 1961. pp.
- 注8) 平塚益徳編 『日本の家庭と子ども』 金子書房, 1975. pp. 174~176
- 注9) 姫岡勤, 上子武次, 増田光吉編 『現代のしつけと親子関係』 川島書店 1976. pp. 107~114
- 注10) 総理府青少年対策本部 『家庭のしつけに関する調査』 1980. pp. 40~43

(昭和58年11月8日受理)

### Summary

This paper is aimed to compare the view of rearing, rearing attitude of mothers, the child-parent relationships and the psycho-sociogenic aspects of the children between Japan and Korea.

The data for the analysis were derived from the questionnaires administered to the 4th, 5th, 6th grade children of the primary school and their mothers in Japan and Korea. The survey was conducted in both countries; and each child was paired with his/her mothers as matched unit.

There were 293 pairs in Japan. Among them 108 were 4th graded children, 92 were 5th graded and 93 were of them were 6th graded. As of the ratio of boys and girls, it was 108 and 145. In Korea, there were 234 pairs, among which 75 were 4th graded, 73 were 5th graded and 80 were 6th graded. Among the children, 125 were boys and 109 were girls. The questionnaires were designed to survey the mothers' view of rearing and their rearing-attitudes, children's perception of their mothers' child-rearing and the psycho-sociogenic aspects of the children's personality in Japan and Korea.

Mothers' view of rearing and their rearing-attitudes in Japan and Korea were investigated by 14 items such as the ideal image of the child and goals of life and so forth. The child-parent relationships identified by the children were measured by the items (Test for Diagnosis of Child-parent Relationships developed by Tanaka) indicating the degree and the extent of how they feel their parents' dissatisfaction and complaining, strictness, expectation, interference, worriness, indulgence, blind obedience, contradiction, and disagreement. The psycho-sociogenic aspects of the children's personality were measured by the items indicating the degree and extent of how they feel about themselves' sociality, independence, aggressiveness, participating in groups, spontaneity, self-control and public spirit.

The findings derived from the statistical analysis of the data were as follows.

1) The view of rearing and rearing-attitudes of mothers of Korea were almost the same as those of Japan. However, differences were found in some cases. The ideal image of children in mothers of Korea was characterized by the traits of independence and creativeness, while the mothers of Japan expected their children to have sensitivity and keeping promise as ideal personality traits. The goal of life of children for mothers in Korea is to be famous and to be royal to their country and the society, while the goal of life of children for mothers in Japan is to live their own life-style freely as they wish.

2) Sex difference is neither correlated to the mothers' view of rearing nor their attitude of rearing both in Japan and Korea except the goal of children's life and their academic career expected from their mothers. In Korea, the mothers of boys tended to consider the children's life goal in terms of the welfare of the country and the society, but the mothers of girls did not take it into their consideration. In Japan, the mothers of boys tended to let them have high level academic careers than the mothers of girls.

3) The child-parent relationships between Japan and Korea was found to have remarkable differences. The children of Korea had a strong feeling that their parents' dissatisfaction and disagreement were not negative more than that of the children in Japan, while for the children in Japan, their parents' strictness, expectation, interference, worriness, indulgence, blind obedience and contradiction were recognized more positively rather than that of the children in Korea.

4) In Korea, boys have more positive view of child-parents relationships than girls. In Japan, for boys, their relationships between mothers and themselves were more positive than the relationships with fathers. For girls, the relation was totally opposite from boys. Their relationships with fathers were much better than the relationships with mothers.

5) The psycho-sociogenic aspects fo the children's personality between Japan and Korea had many remarkable differences. Independent trait of the psycho-sociogenic aspects of the children's personality in Japan were stronger than the children in Korea. However, sociality, needs for participating in group, spontaneity, self-control and public spirit of the psycho-sociogenic aspects of the children in Korea were more stronger than the children in Japan.

6) In Japan, girls had more positive psycho-sociogenic aspects than boys, while there was no sex difference in Korea. For boys, there were differences between Japan and Korea. The boys of Korea showed more positive tendency than the boys of Japan. However, the girls of both Japan and Korea showed that they had almost the same psycho-sociogenic aspects.

As far as the data is concerned, we might say that the Japanese child-parent relationships, the psycho-sociogenic aspects of children's personality are clearly different from those of Korea. And also, the findings stated above seem to suggest that the difference of cultures and the systems of the societies have given very important effects on forming the children's personality.